

# 秋田公立美術大学（仮称）の建学の理念・教育方針

## 建学の理念

### 1 設置の趣旨

21世紀の世界は、グローバルスタンダード（世界標準）という価値観のもとに、民族、文化、地域社会、生活習慣の一元化が進行してきた。かつてそこにあった「多様性」、「多元性」は失われようとしている。これに多国籍企業による経済活動が追い打ちをかけ、環境破壊、エネルギー争奪戦、民族の衝突など、地球規模での危機が生じている。日本国内にあっても、地方ごとの風土色は薄れ、経済格差の拡大は地方を疲弊させてきた。

こうした状況に対し、今日求められているのは、地方の自立あるいは「地方分権」であり、同時に、文化の面で各地方の多様な、そして多元的な価値を交換・共有し合う「共生社会」の創出である。

秋田市がこのような時代のなかで、地域の経済・社会・文化を再生していくためには、人間性が豊かで創造性に富み、総合的、弾力的に思考する能力を有し、それぞれの分野で高い技術水準を備えた人材の育成が重要な課題となっている。また、多様化、高度化する生涯学習への対応や、地域活性化及び人材・技術の地域間格差の是正のため、地方における高等教育機関の整備・充実も強く求められている。

このような状況に対応するべく秋田市は、平成7年に、周辺の町村とともに秋田公立美術工芸短期大学（以下「美短」という。）を設置した。美短は、地域産業が必要とする美術工芸の技術者を約40年間養成してきた秋田市立美術工芸専門学校の専門課程を発展的に改組したものであるが、このたび秋田市は、さらなる地場産業の振興、そして地域文化の再生に寄与する人材の育成を主眼として、4年制の秋田公立美術大学（（仮称）。以下同じ）の設立をめざすこととした。

### 2 特に設置を必要とする理由

秋田には古くから伝わる生き方や手わざが保存継承されている。そこには近代化・世界標準化にだけ向かう生活とは異なる時間・空間・季節感など、独特の価値観が息づいている。文化芸術におけるグローバルスタンダードの時代が終わろうとしているいま、こうした秋田の独特な価値観は、社会経済の活性化、そして芸術文化の発展に、新しい指針を与えるものである。

地方の文化的自立には、その土地の歴史・風土にもとづく独自の芸術創造ができる人材の育成が不可欠である。それは、いわゆる絵画、彫刻、工芸などの純粋美術にかぎらず、デザインのように産業界の要請と密接に結びついた領域

においても、その土地の独自性への対応が等しく求められている。秋田公立美術大学の設置は、そうした芸術文化の発展における「秋田モデル」の創造を目指している。以上の必要性に基づき、秋田公立美術大学を設置することを目指すものである。

### 3 4年制教育の必要性

#### (1) より高い次元での教育目標を達成する必要性

美術工芸・デザインの知識・技術や創造性、独自性を持った人材、地域の芸術・文化・教養の深化に寄与し、地域・社会・産業に貢献できる人材を育成するという人材育成の教育目標をより高い次元で達成するためには、2年間という修学期間では不十分であり、4年制教育が必要である。

#### (2) 少子高齢化および高学歴志向への対応

18歳以下人口が減少する中、近年の短期大学の減少と4年制大学の増加に示されるとおり、大学全入時代に伴う学生や親の高学歴志向が高まっており、そのニーズに応えるためにも、4年制教育は必須であり、生き残りを目指して競争力を高めていくためにも必要である。

#### (3) 学生の就職市場における必要性

美短卒業生の就職率（就職者／就職希望者）は、平成17年度93.5%だったものが平成21年度には71.3%と激減しているが、これは現在の就職市場において短大卒業生よりも即戦力となる4年制大学卒業生が求められていることも大きな理由の一つであると考えられる。

大学で習得した技術や専門性を生かせる職種につけるような力をつけさせ、その力を発揮できるような就職に進ませるためにも、社会で求められている4年制教育は必要であると考ええる。

#### (4) 社会貢献機関としての美術系4年制大学の必要性

秋田市が掲げる「芸術・文化によるまちおこし」を進めていくための中核として、地方都市の文化を発展・深化させる「知の原動力」となるような、より豊かな教養と深い専門性を身につけた人材を育成しつつ、より積極的な社会貢献を可能とするためには、4年制大学化することが最も効果的な手法である。

これにより、在学生在が4年間にわたってまちおこしの活動に関わることが可能になるとともに、研究機能も充実し、芸術・文化をいかしたまちづくりに貢献することが可能となる。

また同時に、伝統的工芸品産業や製造業などのデザインと製品開発力の水

準を高め、ものづくりの振興を図るためのコンサルタント・シンクタンク的な役割を産学連携として担い、かつ「地域ブランド」の振興をはじめとする地域活力の向上に寄与する人材を育成するためにも、4年制大学としての人材、研究体制および社会貢献体制の充実が必要である。

#### 4 設置に向けた基本方針

- (1) 新大学設置による「多くの若者が集う都市環境」づくり
- (2) 大学の「秋田モデル」をつくる（21世紀の地方都市を担う大学像を構築）
- (3) 極力コストを抑えた4年制大学の新設

#### 5 基本哲学

秋田公立美術大学は、「地方都市のアイデンティティを創出する」というヴィジョンのもと、美術およびデザインの領域で、「美に共鳴する知」の育成を目指す。「美に共鳴する知」とは、美術やデザインを、芸術鑑賞の対象としてだけではなく、社会に貢献する知的営為として捉えるという思想である。

従来、大学が掲げてきた「基本哲学」は、学問それ自体の発展・深化を目的にして組み立てられてきた。これに対して秋田公立美術大学は、そうした閉ざされた「自己完結型」の目的を掲げない。新大学は、地方都市の文化的連鎖のなかに自己を組み込み、地方都市の文化を発展・深化させる「知の原動力」として自己を位置づける。

すなわち、大学が担うべき「教育」と「研究」のうち、教育においては地域の芸術・文化・教養の深化に寄与する人材を育成する（詳細は「教育方針」を参照）。もう一方の研究においては、芸術表現の今日的探求に加え、「地域ブランド」の振興をはじめとする地域活力の向上に寄与する人材を輩出する。

このほか、新大学が本格的に取り組む課題として社会貢献がある。住みやすく人にやさしい街づくり、そして商店や企業の繁栄への貢献を目的として、「社会貢献センター」的な部門を設置する。

以下は、これらのための具体的方策である。

##### (1) 芸術の「地方分権」を<sup>齎</sup>げる

日本が中央集権国家になる前には各地方ごとに育まれていた芸術的価値を再評価し、現代日本文化の閉塞状況を突破する。具体的には、以下を再評価する。

ア 地方固有の歴史的地層

イ 地方の風土ならでの都市計画

## ウ 手仕事に凝縮された民俗文化

### (2) 多様なルーツとの出会い

秋田の歴史を現代から遡ると、過去の文化的地層には「近代日本」、「近世（佐竹氏）」、「上方（北前船）」、「蝦夷<sup>えみし</sup>」、「縄文」等の文化が堆積している。これらの民俗文化を掘り起こし、それらを現代とスパークさせることによって、現代のアートおよびデザインに今日的展開をもたらす。

### (3) 地域のルネッサンス

秋田における「里」（里山）と「浦」（海辺）の生活文化が形成してきた環境を現代に生かし、市民の憩いとなる地域（文化ゾーン）を提案する。

### (4) 新しい芸術領域の形成

既存の芸術領域を、現代社会の要請に基づいて抜本的に再構成する。具体的には、明治 21 年の東京美術学校開学にはじまる近代日本型の芸術教育である「日本画」、「油画」、「彫刻」、「工芸」、「デザイン」、「建築」等の区分を見直すことにより、西洋近代の芸術価値と日本古来の芸術価値が並列的に同居してきた近代日本型の芸術教育をブレイクスルー（破壊的創造）し、明治以来学習してきた西洋近代の芸術価値を、われわれ現代日本人用にカスタマイズ（仕立て直し）する。

### (5) 社会貢献の調査研究

授業を通して、地域社会が求めるデザイン活動を調査研究する。具体的には、以下の資質を備えた人材を育成する（その主なものを挙げる）。

- ア 古来の地域資源を活かし、かつ実験的で実現性に富む地域像を構想できる「地域デザインの研究者」
- イ 空き店舗等の修復や利活用策を地域の景観デザインとともに計画実現する「再生デザイナー」
- ウ 公園、水辺、文化施設等の公共空間を住民とともに計画実現する「公共デザイナー」
- エ 行政職と教育職や NPO 等を含む、地域づくりに携わる人材の「実現コーディネートネットワーク」の育成、等々

## 教育方針

### 1 人材育成の基本方針

19世紀の西洋に発する「近代芸術」やそれに続く「近代デザイン」が提唱してきた「個の表現」という価値に疑義が抱かれ、それに代わる芸術的価値が模索されるようになってすでに久しい。その模索は20世紀後半以来おおきなうねりとなり、文化人類学、オリエンタリズム、アジアにおけるアートトリエンナーレの開催など、文化多元主義の思想潮流のなかで、「自分探し」から、民族、宗教、言語、共有された歴史物語などにもとづく「公共のアイデンティティ探し」へと展開を見せている。

こうした状況を踏まえ、秋田公立美術大学は以下の3方針のもとで人材を育成する。

#### (1) 地域に蓄積された「良さ」と「美しさ」を見つけ出す人

美術やデザインの芸術創造とは、過去を否定し未来を夢見ることばかりではなく、むしろ自分の属する地域社会や国家の歴史に堆積されてきた文化的地層を掘り起こし、そこに創造の源流を見出すことであるという考え方から、すでに忘れられていたり、その価値がともすれば否定されてきた地域の「良さ」や「美しさ」を再発見する眼を育む。

#### (2) 地域に新しい芸術の種をまく人

今日の美術界では、「個の表現」という近代芸術の神話が色褪せ、それに代わりクールジャパンと総称される、サブカルチャーに由来する芸術表現が、若い世代を中心におおきな支持をえている。こうした芸術の変容を、従来の絵画、彫刻に加えて、さまざまな素材（物質）やデジタルメディアなどを媒介にして担う人材を育成する。

#### (3) 多様な価値を交換・共有できる人

変動しつづける芸術表現のなかで、アーティストあるいはデザイナーとして頭角をあらわし、その潮流をリードするためには価値の多様性を認める複眼的思考が不可欠である。さらに今日ではこれに加え、異質な価値をいまく相手や社会と、その価値を交換・共有しあうことが求められている。秋田では現在も、効率性や過当競争、そして過度な合理性の追求よりも、自足することを大切にする「里山文化」的価値が継承されているが、そうした価値は、多様な価値を交換・共有できる柔軟な志向を養ううえで役立つものである。